

# 坂村真民

砥部町



坂村真民記念館

坂村真民は、明治 42(1909)年に熊本県玉名郡府本村（現荒尾市）に生まれる。本名、<sup>たかし</sup>昂。8歳のときに父が急逝し、5人の子どもは母の手に残され、生活は苦しかった。中学に進むが、内職をするため友人と交わる暇はなかった。その後、大学に進み、ここで真民は、自己表現として短歌を学び、校内雑誌に短歌を投稿した際、初めて「真民」という名前を使う。この名前は、父親が早世したため、心配した母が姓名判断を観てもらい、新たに授けられたものであつた。

た。当時は、「またみ」と名乗っていたが、59歳のときにある人から「しんみん」と呼ばれたことがきっかけで、この呼称を用いるようになった。

大学を卒業後、熊本で教員となった。その後、朝鮮に渡って師範学校の教師となるも、終戦にともない、身重の妻久代とともに1歳半の長女を連れ、朝鮮から引き揚げてくる。昭和 21(1946)年、「蒼穹」<sup>そうきゆう</sup>同人である佐伯秀雄の誘いで、愛媛県西宇和郡三瓶町（現西予市）に移住する。県内の高校の教員として国語を教えるかたわら、詩をつくり始めた。昭和 30(1955)年、46歳のときに眼の病になり絶望感を抱くが、苦しいときに母がいつも口にしていた「念ずれば花ひらく」という言葉がふいに<sup>よみがえ</sup>蘇り、この言葉を真言としていくことを決めた。昭和 37(1962)年、53歳のときには、個人詩誌『詩国』を発行した。その後、『詩国』は、500号の終刊となるまで、40年以上一度も途切れることなく続いた。

昭和 42(1967)年、住まいを砥部に移し、昭和 49(1974)年、65歳で教員生活に終止符を打ち、詩作に専念できる環境を得て終のすみかとした。生涯、詩をつくり、平成 18(2006)年、老衰のため 97歳で永眠した。

平成 24(2012)年 3月にオープンした坂村真民記念館では、<sup>せいひつ</sup>静謐な空間の中で磨かれた言葉と独特の味わいをもつ詩墨作品、真民の感性とその世界観を味わうことができる。また、真民碑は 700基以上建立されており、日本だけでなく、世界に、その言<sup>ことだま</sup>霊が広がっている。愛媛県では、中予地域を中心に、145基の詩碑が建立されている。

真民の紡ぐ言葉は、弱者に寄り添い、癒しと勇気を与えるものとして、多くの人々の心を引き付けた。愛媛県人権教育協議会発行の『ほのお』『人間の輪』には、それぞれ「すべては光る」「二度とない人生だから」が掲載されている。

## 〔参考資料〕

- 坂村真民 『自選 坂村真民詩集』
- 坂村真民 『朴一坂村真民詩集』
- 坂村真民 『詩集 念ずれば花ひらく』
- 坂村真民 『自分の道をまっすぐゆこう』
- 坂村真民 『坂村真民記念館公式ガイドブック』